様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００４２８

研究課題名（和文）イタリア戦争捕虜「収容所文学」研究―「捕虜の世界史」構築にむけて

研究課題名（英文）Study on Italian War POW "Concentration Camp Literature": Toward the Construction of "World History of POWs"

研究代表者
土肥　秀行（Doi, Hideyuki）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：４０３３４２７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：初年度に、イタリアの「戦争文学」とはという問いに、収容所を切り口として答えを用意した。すなわち、イタリアにとって戦争（一次大戦）は、近代国家への飛躍であると同時に、深刻かつ幅広い「収容」状態により、停滞とトラウマを強いるものであった。二年目は、そうした収容所でのクリエイティヴィティとして、ガッダのメモや習作群を検討した。ガッダにおいては、経験というよりも文学自体が妄執と化す。最終年度は、移動との対比で収容経験を語る可能性が追求できた。以上、異なる角度からのアプローチが、「収容所文学」なる新たなジャンルの提起に、結果的に示唆的であったところに本研究の成果をみたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
世界大戦はなにも戦いや衝突ばかりではなく、一種の停滞も生んだ。「捕虜の世界史」は、戦争の裏を見つつも、深い傷としての戦争（と人間存在）の本質に迫ることを社会に対し、はじめて明かしている。捕囚とそのトラウマや自己喪失に至る効果は、幅広くみられた現象であると同時に、「収容所文学」のような新たな創造性の発露という固有の事象を生む。その固有性に、横糸としてのジャンルを創設することを本研究は企図し、学術の世界で、さまざまな発表や論文でうったえるよう試みた。

研究成果の概要（英文）：In the first year, I prepared an answer to the question of what Italy’s “war literature” was, using a frame from the concentration camps. In other words, for Italy, the war (World War I) was a leap forward into becoming a modern nation, but at the same time, it also forced stagnation and trauma due to the severe and widespread state of “containment”. In the second year, I examined Gadda’s notes as a source of creativity in the camp. In Gadda, literature itself, rather than experience, becomes an obsession. In the final year, I was able to pursue the possibility of talking about detention in contrast to Migrant literature. The results of this research can be seen in the fact that approaches from different angles have been suggestive in proposing a new genre called “concentration camp literature”.

研究分野：イタリア文学

キーワード：収容所文学　トラウマ文学　捕虜の世界史　現代イタリア文学　捕囚とジェンダー　戦争文学　イタリアの両大戦　病と収容

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の背景として、第一次世界大戦から一世紀（2014~2018）を経て、欧州を中心に、大戦についての文化・社会的な考察の深まりがみられていた。ここで確認されたこれまで顧みられたことのなかった事象に、歴史上、類をみない規模と過酷さの捕囚であり、その影響（心的外傷や語り）がある。それをあきらかにしたのは、イタリアでは『塹壕にて。一次大戦の作家』In trincea. Gli scrittori alla grande guerra（当時の若手作家の大戦体験についての2015 年シンポジウムの論集、2017）と、日本では大津留厚『捕虜が働くとき』（2013）である。

(2) 前項と並行して、大戦の再検証の際、夥しい数の戦争文学の発掘と再発掘が、イタリア文学界において進められた。一次大戦は、文学性の強い総合的な経験として、二次大戦と比されて、「真の戦争」（L.スタンダー）とみなされるにいたったのだった。しかし「戦争文学」は、主に戦場において書かれた自伝的記録、あるいは創作として再構成された経験がもととなっている。近年発刊された、一般むけの叢書「大戦小説集」“Narrativa della Grande Guerra”（Corriere della Sera, 2016）は、名作撰というよりも、著名な作家による一次大戦話という触れ込みで、一人称における自己の語りが中心であった。個に根差した貴重な証言が、もはや「文学」作品とみなされているのである。

２．研究の目的

(1) そこで今回の研究計画では、まず勃発と終了から一世紀を経る現在まで蓄積されてきた一次大戦の「戦争文学」研究から、重要な作品のトポスを挙げ、引き続き既存の叢書やアンソロジー（Mondadori 社版等）にとらわれずに、イタリアの「大戦」についての戦争文学を、広く体系的にとらえ、口頭発表や論文執筆、作品翻訳によって、現状に疎い日本の学界と一般に広く認知を図る。

(2) 前項に次ぐ目的として、「戦争文学」の文脈において、戦場の外すなわち捕虜収容所で記されている C.E.ガッダの「手帖」がもつ異質性ならびにインパクトをあきらかにする。いわば「文学者の巣窟」であった収容所には、ガッダだけでなく、独文学者 B.テッキ（1896-1968）、詩人 U.ベッティ（1892-1953）や、戯曲家 A.カゼッラ（1891-1957）がおり、彼らの作品もまた捕囚体験の副産物として、本研究が新たに提起するジャンル「収容所文学」の典型とするよう目している。

３．研究の方法

(1) 国内を中心とした調査と文献資料収集と検討を集中的に行う。以前の海外調査も参考にしつつ、イタリア「戦争文学」文献総合リストと、捕囚体験を中心とした新たな資料（写真や書類）を集めたアーカイブを構築する。

(2) 捕虜収容所跡地のラシュタット連邦資料館（ドイツ）、ウィーン帝国海軍資料館 K.u.K.、トリエステ国立資料館（イタリア）の三カ所にて、捕虜文学についての資料収集を行う。日本で捕囚に遭った B.ピンスキ（1891-?）が残した手帖ほかについて調査する。

(3) 応募者が所属するイタリア近現代史研究会と POW（戦争捕虜）研究会を通して、戦争捕虜資料研究の発表と機関紙投稿を行う。

４．研究成果

(1) 3 年間の成果として挙げたいのは、第一線の研究者との交流と一連のアウトプットの機会である。一次大戦の戦争捕虜研究を担ってきたジョルジョ・ミロッコ氏への訪問はかなわなくとも、引き続き E メールによって情報交換を行うことができた。また南京大学教授の孫江氏から、一次大戦時の英字新聞記事を送っていただいた。これらが POW 研究会での講演に活きている（そこではエキスパートの会員の方々とも活発な議論ができた）。その後、以前から予定していたエジンバラ大学訪問が叶い、収容所文学の代表的な作家、カルロ・エミリオ・ガッダの研究センター代表のダヴィデ・メッシーナ教授ならびに講師のエマヌエーラ・パッティと直接意見交換ができた。また先方の要請にもとづき行った、ガッダに近い現代の作家パゾリーニについての講演会においても公開で活発なやりとりができた。また、筆者の 2021 年の単著『インターライン比較文化研究』Interlinee. Studi compara*ti* e oltre を評価する、ペルージア外国人大学准教授のシリアーナ・ズガヴィッキア氏の招待をうけ、シンポジウムに参加することで、収容所文学とトラウマ文学の地平に、あらたにジェンダーの視座を加えることができた。ズガヴィッキア氏は『“彼女”の文学』Romanzo di lei との研究書で、イタリア文学における女性性を他の誰よりも探求してきたからである。総じて、いわゆる「創作」の源として収容所（存在の猶予期間たりえる場）をとらえ直しが行えた。

(2) 期間全体の成果をまとめると、初年度に、イタリアの「戦争文学」とはという問いに、収容所を切り口として自分なりの答えが返せるようになった。イタリアにとって戦争（一次大戦）は、近代国家への飛躍であると同時に、深刻か

つ幅広い収容状態により、停滞を余儀なくするものであった。それが作家や芸術家に与えた影響は、トラウマと呼べるものであった。2 年目は、そうした収容所での作家がクリエイティブであろうとする苦悩の足跡であるメモと習作群を、個別のガッダの例に検討したが、経験というよりも文学自体が妄執と化していく様が確認できている。3 年目は、移動との対比で収容経験を語る可能性を追求できた。年ごとに異なる角度からのアプローチが、「収容所文学」なる新たなジャンルの仮定に示唆的であった。

＜引用文献＞

Doi, Hideyuki, Interlinee: studi compra*ti* e oltre, Firenze, Cesati, 2021
Gadda, Carlo Emilio, Giornale di guerra e di prigionia, Milano, Garzanti, 2002
Magherini, Simone (a cura di), In trincea. Gli scri*tt*ori alla grande guerra(塹壕にて 一次大戦の作家), atti del Convegno internazionale (Firenze, 22-24 ottobre 2015), Firenze, Società Editrice Fiorentina, 2017
Sgavicchia, Siriana, Il romanzo di lei : scri*tt*rici italiane dal secondo Novecento a oggi (“彼女”の文学), Roma, Carocci, 2016
大津留 厚『捕虜が働くとき　第一次世界大戦・総力戦の狭間で』、人文書院、2013

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 土肥秀行	４．巻 36
２．論文標題 「未来派創立宣言」を読む	５．発行年 2023年
３．雑誌名 文化交流研究	６．最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土肥秀行	４．巻 33巻2号
２．論文標題 未来派の宣言文を読む	５．発行年 2021年
３．雑誌名 立命館言語文化研究	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　9件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 エマヌエーラ・パッティ Emanuela Patti, 土肥秀行 Hideyuki Doi
２．発表標題 （和伊オンライン発表）パゾリーニとダンテ Pasolini e Dante
３．学会等名 イタリア文化会館大阪主宰連続オンライン講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 土肥秀行 Hideyuki Doi
２．発表標題 （伊語発表）60年に渡る日本でのパゾリーニ評 La fortuna critica di Pasolini in Giappone: sessant’anni di storia
３．学会等名 国際シンポジウム「神話、伝統、世界におけるパゾリーニのイメージ」Convegno internazionale “Mito, tradizione, immagini di Pasolini nel mondo”（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 ジャコモ・マンゾリ Giacomo Manzoli, 土肥秀行 Hideyuki Doi
２．発表標題 （和伊発表）パゾリーニの映画と文学：新たな言語の問題 Pasolini tra cinema e letteratura: nuove questioni linguistiche
３．学会等名 第6回ヨーロッパ文芸フェスティバル The 6th Festival of European Literature（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行
２．発表標題 Pasolini 100 ―いまなぜパゾリーニか
３．学会等名 イタリア研究会第501回例会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行
２．発表標題 イタリア文学における鉄道員という父性
３．学会等名 イタリア学会第70回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行 Hideyuki Doi
２．発表標題 （伊語オンライン発表）パゾリーニにおける日本映画 Il cinema giapponese in Pasolini
３．学会等名 トゥクマン大学文哲学部 パゾリーニ生誕100年のために Facultad de Filosofia y Letras de la Universidad Nacional de Tucuman, Homenaje a los 100 anos de Pier Paolo Pasolini（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行
２．発表標題 パゾリーニと若者話し言葉
３．学会等名 第22回世界イタリア語週間（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行 Hideyuki Doi
２．発表標題 （伊語発表）パゾリーニと若者話し言葉 Pasolini e il linguaggio dei giovani
３．学会等名 アルゼンチン・イタリア文学会ADILLI (Asociacion de Docentes e Investigadores de Lengua y Literatura Italiana) 第36回国際大会 XXXVI Congreso（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行 Hideyuki Doi
２．発表標題 （英語発表）パゾリーニと溝口健二 Pasolini and Mizoguchi
３．学会等名 エディンバラ大学ヨーロッパ言語文学部イタリア語部会「パゾリーニ100年」Department of European Languages and Cultures ITALIAN "Pasolini 100"（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行 Hideyuki Doi
２．発表標題 （伊語発表）日本における「片肺文学」 Letteratura a un solo polmone (katahai no bungaku) in Italia e Giappone: "malattia necessaria” a far della poesia?
３．学会等名 イタリア日本学会大会 AISTUGIA Bologna 2022（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行
２．発表標題 イタリアは敵か味方か―第一次世界大戦期の日本におけるイタリア人捕虜
３．学会等名 POW研究会講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥秀行
２．発表標題 熊をめぐる幻想―熊野、常呂、イタリア
３．学会等名 東大人文・熊野フォーラム in 新宮（第2回）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hideyuki Doi
２．発表標題 Pasolini e Mishima: attualita' di due figure “incomprese” dopo 45 / 50 anni dalle loro morti
３．学会等名 Passeurs. La cultura italiana fuori d’Italia (1945-1989): ricezione e immaginario（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hideyuki Doi
２．発表標題 Dante in Giappone fra traduzioni e rimaneggiamenti
３．学会等名 Leggere Dante in Asia Orientale（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hideyuki Doi
２．発表標題 Interrogare Dante oggi in Giappone
３．学会等名 Facultad de Filosofi'a y Letras de la Universidad Nacional de Tucuma'n. Homenaje a Dante Alighieri（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

１．著者名 ジョヴァンニ・デサンティス、土肥秀行（編）	４．発行年 2023年
２．出版社 松籟社	５．総ページ数 339
３．書名 イタリアの文化と日本: 日本におけるイタリア学の歴史	

１．著者名 Hideyuki Doi et al.	４．発行年 2022年
２．出版社 Accademia Ligure di Scienze e Lettere	５．総ページ数 266
３．書名 Dante nel mondo. Atti del Convegno Internazionale di Studi (Palazzo Ducale, Genova, 14-15 settembre 2021), a cura di Massimo Bacigalupo e Francesco De Nicola	

１．著者名 土肥秀行	４．発行年 2023年
２．出版社 光文社古典新訳文庫	５．総ページ数 616
３．書名 「解説」、アルベルト・モラヴィア『同調者』	

１．著者名 Hideyuki Doi	４．発行年 2021年
２．出版社 Cesati	５．総ページ数 204
３．書名 Interlinee : studi comparati e oltre	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関